

平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ブリ

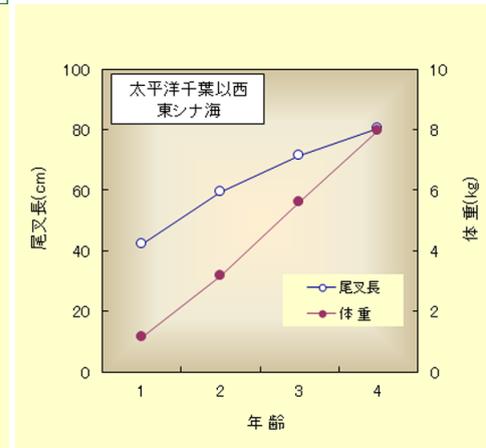
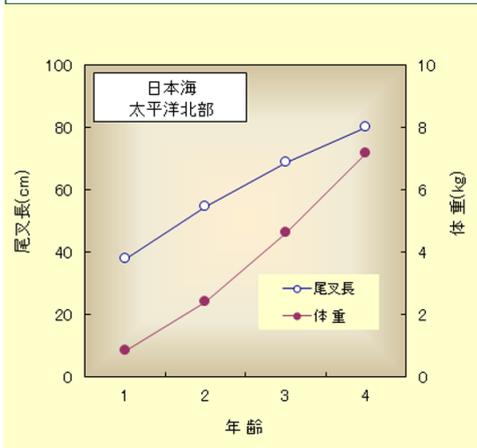
学名 *Seriola quinqueradiata*

担当水研 日本海区水産研究所
中央水産研究所



生物学的特性

寿命： 7歳前後
 成熟開始年齢： 2歳 (50%)、3歳 (100%)
 産卵期・産卵場： 1月～太平洋側では5月頃、日本海側では7月頃、東シナ海の陸棚縁辺部を中心として九州沿岸から日本海側では能登半島周辺以西、太平洋側では伊豆諸島以西
 食性： 稚魚は動物プランクトン、未成魚以降はイワシ類、アジ類などの浮魚類の他、底魚類
 捕食者： 流れ藻に付随する稚魚期には共食いも見られる

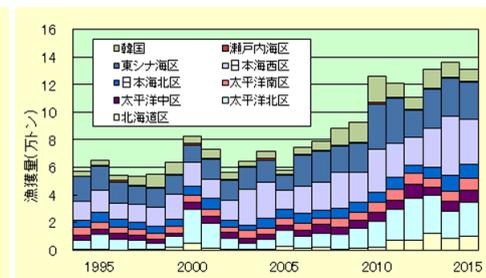
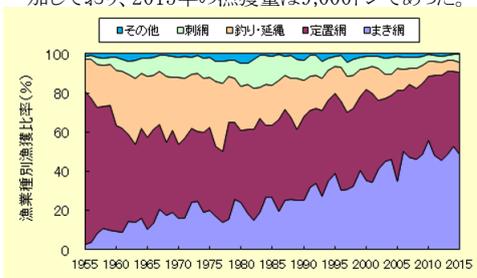


漁業の特徴

主に定置網およびまき網で漁獲される。1950年代は定置網主体であったが、1960年代以降徐々にまき網が増加し、2000年代以降はまき網が最も多い。東シナ海区、日本海西区、太平洋北区ではまき網の割合が大きく、北海道区、日本海北区、太平洋中区および太平洋南区では定置網の割合が大きい。また、東シナ海、高知県以西の太平洋ではモジャコと呼ばれる稚魚が養殖種苗として採捕されている。我が国のほか、韓国でも漁獲される。

漁獲の動向

我が国のブリ類(ヒラマサやカンパチも含まれるが、大部分はブリ)の漁獲量は、1950～1970年代半ばには3.8万～5.5万トンであったが、1970年代後半～1980年代には若干減少し、1990年以降は増加傾向にある。2015年漁獲量は、過去最高であった2014年(12.5万トン)に次いで多い12.2万トンであった。韓国の漁獲量も2008年以降大きく増加しており、2015年の漁獲量は9,000トンであった。

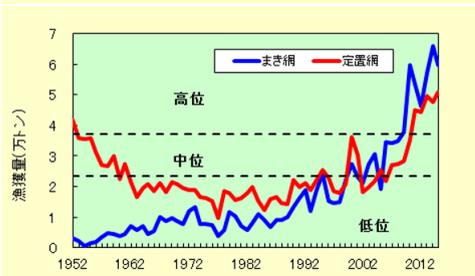
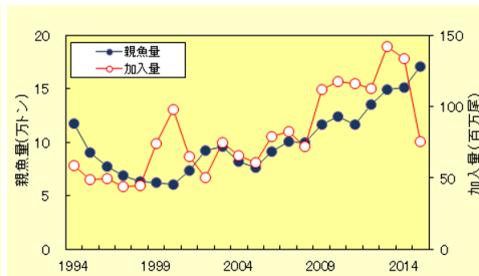
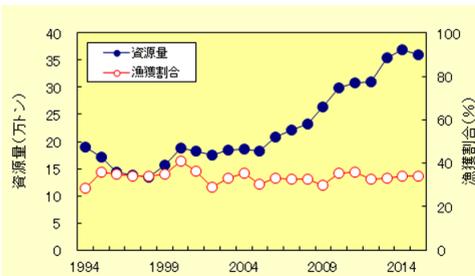
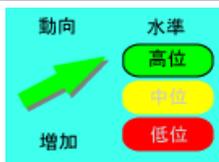


資源評価法

資源量は我が国の1994～2015年の年齢別漁獲尾数に基づく、コホート解析から推定した。コホート解析における自然死亡係数Mは0.3とした。長期のデータがあり、漁獲努力量が比較的安定していると考えられる定置網の漁獲量を資源量指標値とした。

資源状態

資源量は、2005年までは13.4万～19.0万トンで推移していたが、2006年以降増加傾向を示し、2015年は36.1万トンと高い水準にある。2015年の親魚量は17.1万トンであった。2009年以降、親魚量も加入尾数も高い状態で推移しているが2015年の加入は7,522万尾と近年では低い水準となった。資源水準の区分は、1952年からの定置網の漁獲量の最大と最小の間を三等分してそれぞれ3.7万トン、2.3万トンを境界とし、高位、中位、低位とした。2015年の定置網の漁獲量は5.1万トンであり、資源水準は高位と判断した。近年5年間(2011～2015年)の資源量の推移から動向は増加と判断した。



管理方策

資源水準・動向が高位・増加と判断されること、資源解析結果から、現状の漁獲圧で漁業を継続しても将来の資源に悪影響を及ぼす状況にないと判断できることから、漁獲圧の現状維持を管理目標とし、現状の漁獲圧 $F_{current}$ を管理基準として2017年ABCを算定した。一方で、漁獲の対象は0歳、1歳を中心とした未成魚に大きく偏っており、未成魚への漁獲圧が高いことが示されている。ブリは、漁業種類や地域によって利用している漁獲物の年齢や漁期等が異なるので、その実態を勘案したうえで、利用形態を検討する必要がある。

管理基準	Target/Limit	F値	漁獲割合 (%)	2017年ABC (千トン)	Blimit=
					親魚量5年後 (千トン)
$F_{current}$	Target	0.41	29	119	310
	Limit	0.51	35	142	203

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルのF値(漁獲係数)による漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、各漁獲シナリオの下でより安定的な資源の増大または維持が期待されるF値による漁獲量。Target = $\alpha \cdot F_{limit}$ とし、係数 α には標準値0.8を用いた
- $F_{current}$ は2010～2014年のFの平均値
- 漁獲割合は2017年の漁獲量/資源量
- F値は0～3+歳の平均値である
- 2015年の親魚量は17.1万トン

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は増加
- 2015年の資源量は36.1万トン、親魚量は17.1万トン
- 2009年以降は資源量、親魚量、加入量ともに多い状態であるが2015年の加入は近年では低い水準となった

管理方策のまとめ

- 資源解析結果から、現状の漁獲圧で漁業を継続しても将来の資源に悪影響を及ぼす状況にないと判断できることから漁獲圧の現状維持を管理目標として2017年ABCを算出した
- 漁獲の対象は0歳、1歳を中心とした未成魚に大きく偏っており、未成魚への漁獲圧が高い

執筆者: 亘 真吾・久保田洋・松倉隆一・宮原寿恵

資源評価は毎年更新されます。